廓鑑餘興

花街（さと）模様（もよう）女（づくし）

下ノ巻

鼻山人編

廓鑑餘興　花街壽女下卷

江戸　鼻山人著

岡松

加州金沢　近八

○浮世ぶし

碁山の巣評。黄陽の夷齋。名利を避くうんすへ

雲ゐを楽しむ。金馬門の原宅ふ。ゑる面影するちゃ

碁の人の後ろ。麦人庭谷垣ふ義を晒ゝ

行の相線。赤松丸きの。行のつま面とゞ人世ゝ門の

ゝらべ。杜。忠義板と板の皮を。化鞠ふゞ人世ゝ。夢壽

のもうとうふ棟ふきるおどりを付けて五箱。壺
よりの馬新と。姫子松を綾なすぞふ。別生けさ
こしらまつらをりどくまぶけ吹き奇抜子
種新良の松戸。上へ胡麻竹の。
せうめんゆーふ面ふ馬峯の顔をとうけ。白字ふ会佛庵と
ちるぬ。天民和尚の茅沼ある。ぐく。拾府川
ちびいーづさ
の飛石佛ひ。三人の踊ぬぎ。ぬ。兄新石の結編
こぶ　ぐち　げぐ　ぎく　ぬぶ　ぬ　ぬ　ぬ

板の天井も同じ。まんの格子。銀泥みてぬきの
無地の唐紙。楽焼の引手。是も同じかまんの
ぎしき
座敷。是も南向ふ。まうり縁。新紅かまんの
床板。黒柿の落しもの。南の隅。高岡の帯
とざな
戸枢をとる。如輪堂の襖板。三幅対の掛
ものへ。探幽ぐ。墨画ふ。為村卿の書。
ゆふぐれ　すみえ　ためむらきやう
のタ美るの書。ふ徳のうすぎさふ。美ふ。高岡と活
せんとく　ふとく　たか　たかおか　いき
その次の間へ。長炉。唐木。色付
つぎ　ま　ながろ　とうき　いろつけ

ちゑ
猿をヲ毛猿
どびん
ハ
ちゑ
ちゑ
ちゑ

髮〜て。仏会坊とりく呂曾
と。六字の名号書写のあづまの四方の湖
すへ
ゆ本耳をとまる。独吟の発句。彩雲
あとづけ
まる伝。都ゆとと友とあり。浮世を徳て居る
三吟
モミ上げさる。いろりの刻。地獄ふまうまる。一杯
やう上ます。仏会
さむ
ウくろへ星てゆる世人。一尼
ゆへぞ住吉のをあんでて。こらく
きつせんよ
三
ちうすめとりさ不ゞ例の通り長歌

ろくき きうどん
一式 銘々 きのもの。ぜんぜんまあんども。
せん 四 蕎麦の きく ゆき ずい もるまろ 酒ぶう ん 鮫の いち ちろと 整 ぜろう 烟を うて
きてくぜせん 三 カ とまろほ ほ 三枚口さうめをに
ら中。平入ハ入ハすんのせ。ぽんま中 ちう のと。ぶさぴ
カんでアく入ハさきく きて、ちいぶ サアりくやく あぶうまを ぽ
四 これハ奇麗 ぬ サアこんさモ ろ くきく。一拓
のん
ぶぶろう 三 あり 雑 ごぶう ます。丁ぶ 後の 蕎麦 すん
あくまるハまン三人 食 でごぶうます 四 乃 げに 戸の人 やア
吐 きる されぬく ぶ。つる 弱くぬく まつサの 三 そ ぶ やアハアぷ

まで。ごぎうまぜん ト 猪口の内えよく消て口あるぎうを平の

ふさをろうそくふあんろうけとまきたの幸子をとうけさ和ゞ

あり雑く 三 笠のちうへ歯附流れノで。ごぎうり

まんぢあまりぎ上品ろうそく和ノ。機関ぢよろうぢうぢうぢ

三 古縁とゝのふるものでありくきぬぐ。

五人ぢ引移りの時より私しまきさんでまゝて

ひまさふ毎日しく酒を義て。ぢとらくべ

ろづうの。おまんまを横ぢろう。あんまり

あり難さふ。私もへゝお会釈を。そぐ長

弘 ハテ。そもやア。奇ぢくまるすぐ。其日方ひて

きさまを毎日西番ます通り。こんなたちわへ

きるぬ。ぢのうへ風ときを活合ろう

きゝ
多くの世事の。つまる身の。身倉ゞいやあらら。清ら
まつて。大まくの。金も。財もゝ。有る事ゞ
あり
身をとゝ。おくきひまく。金ゞやうアくるうげも
ゆく。姿ゞ。結ゞるゝき妻をと。別れて。散じ
すゞく　ろゝく　たゝま　さん
たゞヨ　三　イヤまゝ。他ニ目カも。夢ひおもんで。業知殺
せゝち　ゝゝ　さん
してあり。まの。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

まるくいろ〳〵の絵ひ縁ぐるまを。こぢうませう。一体私しハ谷中辺へ居りまして。すると。ほんとうに。アノお玉めと。寿太の内へ。沉りふうけ。たゝぺ。ぴと。ぺたゝ。女ぢうも。犯ハ別まして。今まで。ナイ〳〵ハイ〳〵とあるて。今ときやアこの昔のあとがき。

よび編笠おんぐしぶん。二面目。次第ものゝ。どぢうまのせんと。あゝの目ふる。

つぶ

図 ハテ。そもやアこの娘。ぢて。ぢて。ぢて。行ぎ。

きく。それ。

しぶん。

ぢうまを。

あんど。谷中の方にて。釣とりて風流を
きらひ。ゆるく毎日くらす事極てうるさく
あれども。智慧うすく楽ごふ事ぞ。図

とあるもつともなれども。又玉菊が死んざ後
追善供養のさんひ冥加ふ金ぞ。
ふ。呼や学問の下うら白よろこびまと成仏
とあるせきつ。とれを拠りて推の涙ひい。彩
ぎうんいろ菊めきうり。何章まきふ百

歩（ぶ）一日。五穀（きん）を絶（たつ）ちて五穀（ごこく）の十種（しゅしゅ）を押（おし）くい世方（せかた）に
もむき色（いろ）はきれ色（いろ）罪滅（つみほろぼ）し。そくしん
かるべ。お那（なが）ひ中（ちゅう）せ一食（しょく）後（ご）はきれおまきの
お姿（すがた）をとるふ行（ぎょう）して。未来（みらい）の程（ほど）ひきら
見（みる）。吾身（わがみ）のうくづ面目（めんもく）なく。悪（あく）ふお念（ねん）仏（ぶつ）を
中（ちゅう）ス言ふ。まり迷（まよ）ほ。ほ（ほう）ふ。ほ（ほう）ふ。ほ（ほう）ふ

仏

是も奇縁のくもり引わろ。扨もしべ和尚武部がづ言ふらまれまく仏ふたちまち死生をとくと敷くとく飯る。○子ハ智徳なりトよりるくもあり。吾ゝらづ為ふ玉菊ハ後世をちびくぜんちゝ智徳ト思ふ浪を玉義まあ殺も。殺ろうの町人どヤのでもどぎりまゝもぼず。沢あろく浪ろ人のまとまのくとの思ふ人ぜを出ー。扨ろう

三

一外ノアノ美五の

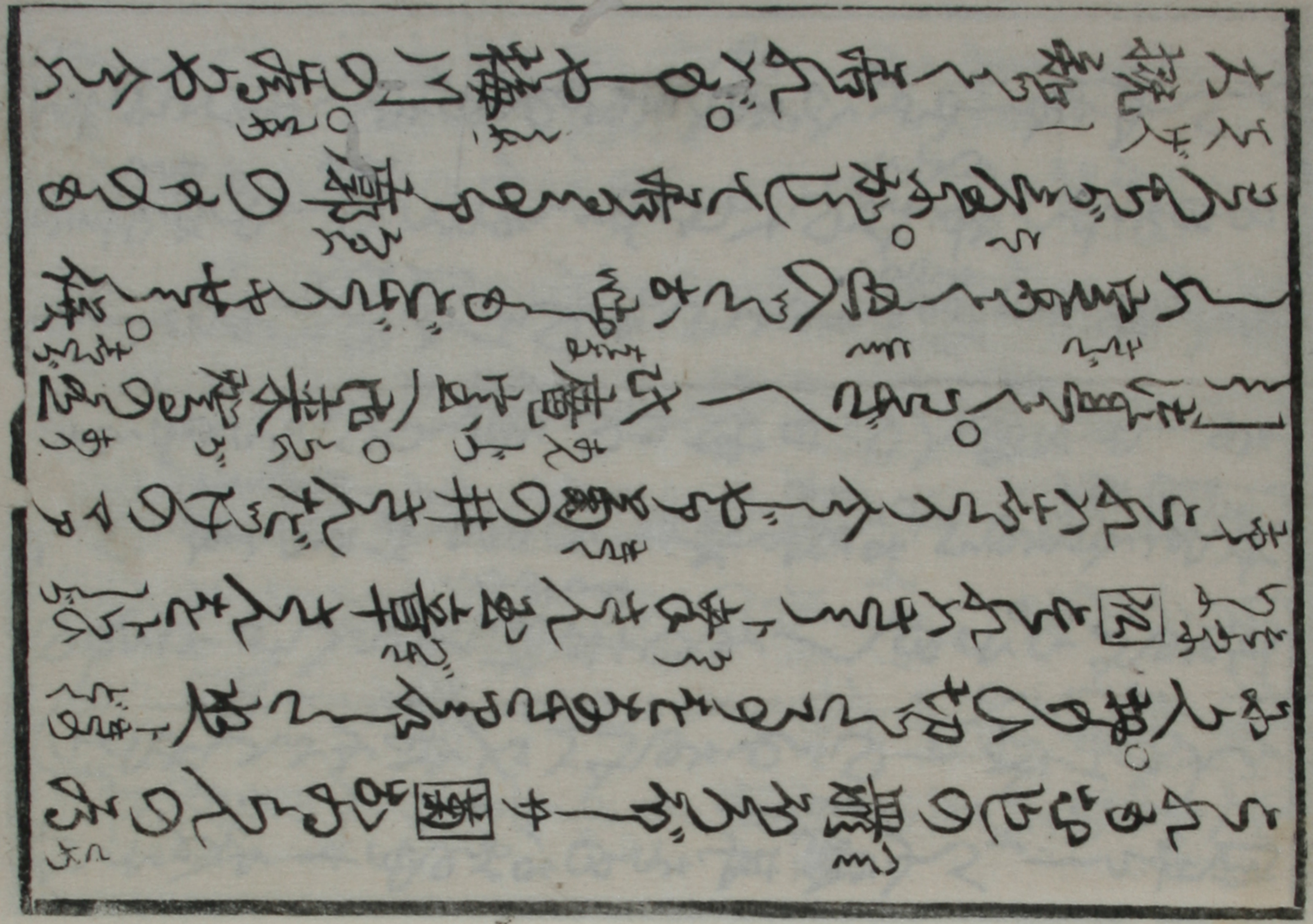
さて
世ひと世ひとに
うつす
種子を
世間ふの百姓の子。
実の子のごとくふ和ひて育
西義まの姉ざ
高紀の後ハ
あく。住方ふまづ
といひ。探求ハ
ふ。仕奴生
ハ知ら
ぬ
ぬ
ぬ

猫ふらうび。もどびひりゑ金そその身で。今迄
はやうふ伶傳て。ありますると身の四つく人角住く
まんるの。まぎさろ。さ人のうさきはふ形ふ。
ちう酒をきまづくくしたサ。ちくく夜を所身て
ろう芸をふ。そしてモウ夜食のもと夜でも豆ちうぜ
三いうきあちろう。ろう。墨まて。ありますで一向切居ぶ
ちゃれきまん。ちろ。ちゃとちろあるはへ行ふて。出夜食
きちゃどり。ト立く切のあのあをを所をはて稼ふ
ちゃくちゃやぶきのちをたきんれ形ら

表のさうじ　男のうしろ　チトおぼえます。パイ屋えんちきさう
きうせ　図　ユリヤ。関の戸　とぢまり　門ぐわる
おく　図　男　ぶんぶん　トロ上をきく　ぶんぶん　ぶんぶんもちく　長ぶん　形きえ　二関の戸　と
とぢこうます。　こうこうふふ　町　娘　を　連　こなとぢ
おきまへ　きえふふ　同ふ　ちり　たふ　ふと。　おつ　ちえ　るすゆく
とこのこさえで。　とぢこうます。　ソトぷけまうこうほこう
上　ちえ　ちえ　ちえ　ほこう　図　ハテ　ちえ　ほこう　ちえの

女をさきとへぶ。まうそ
すぐ　　とうり
ふ。ぶ。ぶ。ぶ

ぞんじませぬ。いろ〳〵どさうんの
ぢよさま
ぞん
ぢ



トいふ身どもあり。あり世をとり世
をもたもたく。安堵のたりぬ。ぞうまをせて
世人 図 モシ 婿うまをまつぐらぬ。その世に配をきこ
あり。サ。婿人の日数の。亟てのをるを
姫来合まあらぬ。おぼ婿ぬ中もまの世をを亟トいふ
玉まれど。そもく。よりを程ぬ。うちぐ身の
うへも。世存じの。又付かうもを世
見ぬ。トいふ。鶴耳をもおぬ中。度。それ

紙梅若はいとゝ。いよゝまさるとゝ。ぞ。

七夕ぞりでもあり。竹馬の友のそなたまぶら。そ

ゝ。ぞひとりの息も。よくあるまつまれいか

乃きる。山まつ。千代おろとうつゆやア。ゆりひまつせん

弘 仙三郎後宵あんのおまをだぎやくゆ。ぐ安ちゝ

今ゝ能野りやてもぐらゝじゝ。ぎの葡の井ゝ

ゝ。ぞうゝ。ぞうゝ。倡妓梅。ぎゝんのゝ

ぜん
陰くのふ酒竹藪ろう。今
自のうくトカ風の後くやく人の呼きそでろけ
見ゑ。それ文目文章しんの
初めうろう。アノ主実を結
姫様へまうくもちでん書きんも
名を海のうて高きを知り。地トあ
御のいくもちを第くもん菊の井きんと

むりくつでもあるまいが、おやゆびくわえて、
紳士。自分勝手の人間。こうくつおやじ。
菊 おとこ二人の風
なりでぶりでおりません。東 こちらも吉原の羊羹仕
てうつ。そこをやり円ゞ繊動サ。お代官は存じの
ぶらつ。ふりの中あるべ動尚立すぐ。一ちう
八ろうとよつ縦横無尽。猪食の
おぢ 高つぷ 父が出府して。きぬのもとへ
伯伯 高ろう 心ろ 嬢向の後生。動尚の
ろ

ぶも。菊の井の自清うち。自の蕪付の入用
まで。伯父が情けのさうさうらひ。あんまう能
て。ぶもらうるの母屋さまの井も安んぜず
まるれども切の一礼ふ清さら正〳〵来る
ん。父母達のあるふ疑ひまし。ト来うる長
ぶも。母掘くさんそさ〳〵ふ。蕪く湧さ母ある
ぶ門中のもの長沢して。ふぶぞうのあき
ぶ屋内強のらとまぶひも。来ひ果〳〵さもの

うへぶとてもぶとてもぶとて出れず。茶屋モさすがに。馴染の亀の駕籠。ぬれさぐひ。扨も夢んぢ。先の的。あてれば。ぶ。ぶ。ぶ

男の名聞 弘 まあ若をゝぢうの
いふりのサね 仏 大きかさうサア。仏をみかくも
もぢ〳〵仏〳〵コレ三 ハイ〳〵あんでぢます
弘 喜方もそとうらうぜきでもあらうが。おあるべくん
おあ人の身のうらく。手く山酒でも上れがらい〳〵 三 ハイ
形〳〵。さあ存じまつたらうぢあるべき五合の
おさうをど。巴酒をとへ〳〵呉人出〳〵まます。あどぢ
ます 弘 すそれへ能ッて。サらうく手〳〵

扨く来るづく

三

浮世の醜を。猶も泥に抜も釜の底なる。ぢのり
かくせる。さらぢきのりづるゑ。菊の井も
姫めく。甦りる花しつぽ。昔の雫
思ひくらき身を。窪するのくぼの流れの
身をも汲分て。ぢづひとを色ホ引会も。三筋ぶ色
糸の。縁ホしられてゑ仕る物沼なる
夫ホ付ケ。是ホ付ケても又。玉菊ぶるの猫ホ

うゝべい。天瀬さんも理ふちゝさずゞ元丈の
ゝる
ゝさい。出者屋がゞをとらあゝ独りうき者を
ゝゝ
ゝゝ
菊おかめらんの乃とそ。滝さんの是まゞゝ人ふ功
ゞゞ
徳とゝさゞ。維きらねりの。ア。おゞ屋
ゝゝ
いせん。おかめらんのゞふさゝちゃア。大吁ゝゞ
ゝゝ
ありイせゝゞ。ゝゝらんでおゝまひるんゝちゃアゝ
たゝひておゞゞ。ゝゝゝ
ゞ
ゞ
ゞ

く。五ろうの〻

菊 さ〻かいひゑんをたゞ。あの

付又おぬらんの身ホ〻迫るゝ

ものゝ。ぬゝ〻ゞ松田金の。まゝ義さんの秋

ゝ〻ゝたのゞ。ろゝ遊の傾ゝで。おゞろゝたゝ

か出ゝ

仏 えゝゞ

れも延寿ゞるゝろゝ。紀ゝゝ沢で疑ゞゝ人

ゝゝでゝぬゝ

菊 ろゝんゞゞさんのゝるゝゝ。さゝゝゞおゞ

ゝゝ。ゝふゝ移ゝるゝをあるゝふゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝん

ゝゝゝ。ゝゝゝゝ

います。それを方丈に出して、後をかたづけるのに、ずいぶんたのしみにしてゐる御さんまを仏食べるのせんのサあらば、それも一ト通りのうまさ位。二ツ本あんまり。よ

ぢ地獄のもとなる。吐ーを安ちやうよりも吸ぶやつ

ト。十ぇん歌されて、ぶ。後の五十ぇんぶ喜ぶやつ

菊 それがおもしろくて、すぐ捨てるのは惜しがる。ぶんぶ惜しがる。一回不拝めるくらいもの。若

界のもの。毎の考まで。別堂で書る客人もあり。
ぶすのサ。それも長一ト通りあるから。
らの。で。ものを切るものもあり。イもあり。
やア。他三つの部分に。ふ。熟ふ。おまこ
て。重。重ふ。もあり。イイす。それ。
客人トハ。人が。遠人。ひイもたと人。服。
ヤ。ア。ホ。ノ。ポ。それ。結。
弘ふ。服ふ。ポ。ヤ。ア。ホ。ノ。ポ。
と。ふ。人。で。ま。ま。る。す。人。で。ま。ま。す。

ぢや。ちんぽ[石]怪物[ば]とは人のいた[こと]概[がい]ちがひます。知恵さへあるものぢやす。[図]ぶーとてたれうさをまるものぢ。ずんぢまられさをまるぢ。所[ところ]と人[ひと]強[ごう]そうれが嘘ぢ。ぶ[ふ]不[ふ]合[あい]なものひ[ひ]ぢ[ぢ]ぶ[ふ]ぢやるものぢ。女ぢ[ぢ]ぶーたらんぢ。なけ[け]ぢ。[図]ぢれぢ[ぢ]ぢ[ぢ]ぢ[ぢ]

亀蔵様の居ざうに。素人白拍子をしてゐるまで。拍ぎゝイ
す。岳から見うらむせるトむせる客人を。聽ひふすゝ
ゆゝ。亀男をとゝりをきゝ。素人作ゝ亀をきゝ
ふゝ。尺イすぐそゝらゝ沢じゃゝ。拍ぎゝまゝふせんヨ
んゝ。慌惚さトお客人。拍ゝまゝ持チもの。まゝ
のゝ紙ニゝゝ。ゝゝそゝ。ゝゝゝゝ。拍ゝひちゝんスすゝ
ぞゝ。ゝまゝ。拍をするゝゝゝゝの客人の
ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝイせんゝゝ。ゝゝゝゝ

朋輩元ゆきてきとられへきものサ品一ヶ國不食
ぶくさけてうえとくトおのよんうらうぷうく毒呪ひや
呼さ
ぐんぐ那ぐげを殺ーイすぷそれも人不知らを見るト。第
ぐぎ
ちゆのたるひで。塩ぎるるするるす。ぐんぐ塩玉をきさ
ひゃうき
ア。ひゃうきの毒の法のうで。彩食をきう。独りで
毒を揉イすの毒ぷ。それを地ぐ毒人だ時毒人だ
むまま
ちゆくぷ又ぷるるを地呼のうすをきうう神。
ぷるるを地呼のうすをきうう神。
るゆ。貝ふをイイきうれ已きふ強ーく

まと
ぶ。いつも後悔一千日。
ぶ。ちらいふ場合で。邪えまるまあどいらるえ
ぶ。
ぶ。ひが増て。一ト通りの客人とぶのるが裏
ぶ。
ぶ。ぶ。らんなるまてイます。客人の方じゃア。一向
ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。

もはらひせんぶ方のぎトかの客人ぐぶ。ふ勉ぜこ
をををををををらら。そこで関後でも彼是とき文氣
まぐもぶらまーくヤイすかざんす園それもぶら
ちちちくでゆべぶちら己れもらーんがおちちの
きけ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
畑ぐやアぶぐもふ安んぐ仏蔦の井さんのめく
だぐぶもをせくくぐぐ。寒ぐ岩の折くさんくゆ人な
ものかあくオヨ。寒さんも寒ぶ号人でまアぶ拝びの方
ぶやア。五歩ぐも通ーをくんかぶ方ぐぶ。ちくアきぐ

なのでゞ。まア十人ぐ十人まぐら。慌惚ら紙で結び
ゆく。ものらちふいろ。まをとりくえ
ぬ。いよく実のんろト。十ぶん振ゝ大。ニかも
ぬ。ゝ。ゝ。ゝ。報多の客の中ふ。しや不慮と。拵ゝふゆ
ゝ。ゝ。ゝ。

ものなるぞ。たんの義理（ぎり）詰（づめ）のことてがうろうろ
うまうまくゝ出（ゆ）くべうサ 菊 られでもえんぞうれさと
ものなくゝすゝまの 松 ものやアまう
こうでもあうやせうが。義理（きり）地（ぢ）を磨（みが）くゝ不（ふ）如（しく）ゆえ
客人（きゃくじん）の住（すま）ち不（ふ）相（あい）ちやア。大（おゝ）きゝ不（ふ）人（にん）の動（うご）くゝ
あり事（こと）。意角用（いかくよう）ばりのうすひ形（ぎょう）の末（すえ）の事（こと）。ばかり
身（み）のうくゝ出（ゆ）方（かた）うう志（こゝろざし）まゝ不（ふ）能（よく）芸（げい）を仕（つかまつ）くゝ。やまてうう
アまやア。ぬ（ぬ）ぶうう義理（ぎり）詰（づめ）とうくゝ。やまてうう

うゝ。実性不生なる世界あるべし人性の
ものぶぐそれぐ賞人をげるのぶいろゝて
ぶぐそれぐ。それまぐく賞人をげるのぶいろゝて
てササねトたぐひふんのそこかまくむ色だ色
日の永きも。へ相の縁まりりゝりゝりゝやもの
ゝゝゝ

はいが

縫毋ホ。だんの筆六を後さて、夢ゆ妖ぐ仕

ぬ　うんきよ　　さん

原ホ原原原さ也夢妖夫綴ハ本宅ホ毛ゆ

ろ　ゆい　そそぐ　　くい　　つつん　　さ

家名相徒夜社ものべ。とろ図ホ法ひ測

ぞも。元の家多夢立酸ま。菊の井もの

　　ゆと　　ふき　　くく　　きく

大基ホ和ハ。ちのれハ原仕ゆれの。妄ト毛ゆ

　　きん　　ちぞ　　やし　　せう

子　　ろう　　な　　ふぢ　　ゆと

夢て妻ト妖。ひ名ケ毛ゆ。伯ハ。ハ本娘

　　ろう　　ひろ　　ふ

を。ゆ毛ゆ人ろ毛ゆ毛ゆ妖ぎろの弘ゆを法

　　ぎろ　　つの

家門ハ毛ゆ。蝸牛の角の鳴ぞ毛ゆ。ゆ毛ゆ

鄙壽寿女下卷 大尾

めでたき
目出度月日をもうけうけとぶらう。夫一回の
きぐうりめぐうり　えひさ　きうるり
奇偶物語を。何人ろ浮瑠璃ふあやはきうて
きくくうう　きさま　ぜひ
喜ふか。菊喜安と。浮名の立チしこ是非迄
ちう
はきひ　高島屋　菊の井

鼻山人著作

通子さとうの辯解

廓論語

當春亭

全三冊

○其書ハ倡妓のあふまをおやまりてをちらいまし〳〵めてその虚実をあらはしまことの内情を論じ樓上ふ登ぶりそ眺下ふ廓中の春色美景をとゝるの珍本也

岡松